

2014年9月8日 9月11日改訂 11月28日再訂 12月2日三訂

中国・ベトナムの漢文文献の中の南シナ海方面の記述について 補遺3

嶋尾稔（慶應義塾大学言語文化研究所）

南シナ海研究の金字塔である浦野起央氏の『南海諸島国際紛争史：研究・資料・年表』[浦野 1997]は漢文資料も豊富に掲載しており19世紀以前の問題を考える際にも大変有益である（ただ、中国の研究者の解釈を鵜呑みにしていると思われるところが少なくない点には注意が必要であるが）。本編で見落としていた重要な資料を、同書の中に発見したので、ここに補足する。

1. 陳倫炯『海國聞見録』に関して、私は「南洋」の項に出てくる「萬里長沙・千里石塘」に注目して、陳倫炯が両者を区別していないと述べたが、それは全くの誤りであった。「南灣氣」の項でも、「萬里長沙・千里石塘」の記述があり[浦野 1997:117]、そこでは両者は明確に区別されている。「南灣氣」の項における「萬里長沙・千里石塘」に関する独特な記述の仕方について検討を加えておく。漢文テキストは末尾に掲載する。

「南灣氣」は、広東省北部沿海の南灣島の東南の海上にある危険な地域であり、東沙に比定できる。その気は「沙垠」（海中の砂丘列か）として南へ続く。まずそれは「萬里長沙頭」となり、「長沙門」と呼ばれる海域を挟んで、海南島萬州あたりまで続く「萬里長沙」となる。長沙門は広東からフィリピンのルソンに向かうとき通る海域である。「萬里長沙」の南には「七州洋」まで続く「千里石塘」がある。この記述に対応する描写が、同書の中の「四海総図」にみられる。ここで語られている「七州洋」と「南洋」の項に現れる「七州洋」は明らかに場所が異なる。「南洋」の項の「七州洋」は海南島の東南の海域で中国からインドシナ半島に向かう航路において最初に通過する海であった。ここでの「七州洋」は海南島よりはるかに南方であり、「崑崙」（Pulo Condore）の近傍である。七州列島近傍の海だけを「七州洋」と呼ぶ場合と七州列島から始まる沿岸航路の全域を「七州洋」と呼ぶ場合があったのかもしれない（後述）。あるいは、単なる誤解や無理解で陳倫炯が混乱した記述をしているだけのことかもしれない。いずれにしても、東シナ海から南シナ海まで「南灣氣」→「萬里長沙頭」→「長沙門」→「萬里長沙」→「千里石塘」と続く地脈が、「東南洋」（フィリピン、ボルネオ方面）と「南洋」（インドシナ半島方面）を区分しているという独自の海洋観を示しているという点で興味深い資料である。「四海総図」は不正確な概略の図ではあるが、大まかな印象として「南灣氣」、「萬里長沙頭」、「萬里長沙」、「千里石塘」の位置関係は、「東沙」、「中沙」、「西沙」、「南沙」に対応しているようにも見える。中国方面の地脈がパラセル諸島方面を通してスプラトリー諸島方面まで連続しているというイメージが、中国人のその後の領土観になんらかの影響を残しているという可能性も考えられるかもしれない。

なお、西洋の大型帆船は、インドシナ半島南方（「崑崙・七州洋」）から「萬里長沙」の「外」

(東)に出て台湾の南方海域(「沙馬崎頭門」)を経て、福建・浙江・日本に向かうが、中国からインドシナ半島方面に向かうときは、「萬里長沙」の「外」には目標物が無いので、沿岸航路を使うと記されている。広東を起点・終点とするような **Outer passage** は記述されていない。

2. 日本人の朱印船貿易家が使っていた航海図の描写の中に、「萬里石塘」「萬里長沙」と書き込まれたものがあることを浦野氏の研究は指摘している [浦野 1997: 135-139]。17 世紀前半に東南アジア方面に向かった日本の貿易家・航海者が、ポルトガルの海図をもとに作成された航海図を使用していたことについては、比較的多数の資料が残されている [大阪府立図書館編 1992 : 図一〜八] [九州国立博物館編 2013: 94-74,215-218]。これらの航海図では南シナ海の中央にパラセル諸島が明確に描かれている。そのパラセルは、まさに本篇で指摘したヨーロッパ人航海者の「想像上のパラセル」である。この「想像上のパラセル」の上または脇に漢字で「萬里石塘」「萬里長沙」と書き込みをした航海図がそれぞれ一点ずつ存在する。

一つは、末吉孫左衛門が朱印船貿易に携帯した伝えられる航海図である(九博のカタログの 69 番)。国名や地名を記した小片の黄紙が 106 か所に張り付けられており、パラセル諸島の上に「萬里石塘」と書いた黄色の紙が貼られている。オランダ通事・蘭学者の本木良永(1735 - 1794) が付したと推定されている。いま一つは、長崎の唐通事の家で養子に入った盧高朗(1847〜)が模写した航海図である(九博のカタログの 74 番)。パラセルの横に「萬里長沙」と記している。いずれの書き込みも 18 世紀後半以降のものであり、17 世紀前半に朱印船貿易が行われていた時のものではない。

こうしてみると、17 世紀の前半の日本の貿易家・航海者は、中国人の海洋観に従うのではなく、純粋にヨーロッパ人の南シナ海認識に基づいて航海をしていたことが窺われる。ヨーロッパ人航海者流のパラセル認識がアジアの海の多様な航海者の中でむしろスタンダードなものであったのかもしれない。後攷を待ちたい。

3. 韓振華らの研究の指摘するとおり、『海國聞見録』の「四海総図」は、それ以降の中国における地理記述に大きな影響を与えている。彼らは「四海総図」の系統に属する 12 の資料を挙げている [韓 1988: 312-316]。このうち以下のものの現物あるいは影印を確認した。

徐繼畬『瀛寰志略』(上海: 上海書店出版社、2001)「南洋各島図」pp30-31。(活字本であるが、地図は原図を使用あるいは模写)。

馬徵麟『歴代地理沿革図』(同治 10 年 [1871] 刊)「輿地図」。慶應義塾大学三田メディアセンター所蔵 (google books で利用可能)。

王之春編『國朝柔遠記』(光緒 17 年 [1891] 刊) 卷 20 : 9ab「環海全図」。慶應義塾大学三田メディアセンター所蔵 (google books で利用可能)。

次の資料は韓振華らの研究が「1860年《皇朝輿地略》」として引用するものと同じものかもしれない。

『皇朝輿地略』（道光11年〔1831〕刊）の別冊「皇朝各省地輿指掌図」、Harvard Yenching Library.（Google booksで利用）。

南シナ海について中国では19世紀を通して近代的な地理認識は普及せず、伝統的な地脈観にもとづく非現実的な認識が続いていたことが確認できる。

『海國聞見録』は、不正確な世界地図である「四海総図」のあとに中国の沿海地帯を具体的に・詳細に記述した「沿海全圖」を載せるが、この地図には海南島（瓊州）より南の記述はない。『國朝柔遠記』も、『海國聞見録』を踏襲し、実際とかけ離れた世界図である「環海全圖」のあとに、詳細・具体的な中国の「沿海輿図」を載せるが、やはり海南島以南は記述されていない。19世紀を通して南シナ海は中国の沿海部とはみなされていないことが見て取れる。魏源『海國図志』（台北：成文出版社，民國56〔1967〕、道光27年〔1847〕刊本の影印）巻2は各種の中国と世界の地図を載せる。『海國聞見録』『四海総図』系統の地図はないが、「圓図」（世界地図）、「東南洋各国沿革図」で「萬里長沙」「千里石塘」を記述している。しかし、中国の沿岸地帯を描いた「沿海全圖」は『海國聞見録』『沿海全圖』や『國朝柔遠記』『沿海輿図』と同様、海南島までしか記述していない。要するに、これらの資料では、「長沙」「石塘」など南シナ海方面は外国を描いた地図にしか現れない。

『海國聞見録』『四海総図』および『瀛寰志略』『南洋各島図』における「七州洋」の記述と『國朝柔遠記』『環海全圖』のそれには微妙な違いが見られる。もとより、おおまかな地図であるから、細かな違いにあまり意味はないのかもしれないが、一応取り上げておきたい。前二者では、「七州洋」は中部ベトナムの東側に位置するように記されているのに対して、後者では海南島の東南沿岸に位置するように描かれている。「七州洋」については別に詳しく検討したいと思うが、ここで見通しだけ述べておきたい。「七州洋」は本来「七州山」（七州列島）と「獨猪山」（大洲島）の間の海域を指す地理概念であったが、次第に「大洲島」一帯（海南島万州の東南）を中心に中部ベトナム沿岸に広がる海域が「七州洋」の名で呼ばれるようになり（やや遠方の福建人の視点によるものかもしれない）、さらに中部ベトナム沿岸の範囲も拡張されて「外羅山」（cù lao Ré）から「崑崙」（pulo Condore）の間の海域まで含まれるようになったのではないかとひとまず考えておきたい。「崑崙」近傍までを含む理解は『國朝柔遠記』の作者には違和感があり、その位置を海南島の東南に戻そうとしたのではなかろうか。他方、18世紀後半には広東から東南アジアの諸国に向かうときの航路をおおまかに記述する際に経由地として漠然と「七州洋」の名が使われるようになっており〔韓主編 1988： 77-80〕、広東近海からプロコンドール周辺までの海域を広くこの地理概念に含めるような理解（誤解？）が広まった可能性も考えられる。

陳倫炯『海國聞見錄』（雍正 8 年〈1730〉、乾隆 58 年〈1793〉重刻）上卷、20ab,25a,38a-39a. Harvard Yenching Library. (Google books で利用)。

南洋

(略)

廈門至広南、由南澳、見広之魯萬山・瓊之大洲頭、過七州洋、取広南外之咕嚕囉山、而至広南。計水程七十二更。交趾由七州西、繞北而進。廈門至交趾、水程七十四更。七州洋在瓊島之東南、凡往南洋者必經之所。中國洋艘不比西洋呷板、用混天儀、量天尺、較日所出、刻量時辰、離水分度、即知為某處。中國用羅經、刻漏沙、以風大小順逆、較更數、每更約水程六十里、風大而順則倍累之、潮頂風逆則減退之。亦知某處。心尚懷疑、又見某處遠山、分別上下山形、用繩駝探水深淺若干、駝底帶蠟油以粘深沙泥、各各配合、方為確準。獨於七州大洋、大洲頭而外、浩浩蕩蕩、罔有山形標識、風極順利、對針、亦六七日始能渡過、而見広南咕嚕囉外洋之外羅山、方有準繩。偏東則犯萬里長沙・千里石塘。偏西則恐溜入広南灣、無西風不能外出。

(略)

廈門至暹羅、水程過七州洋、見外羅山、向南見玳瑁洲、鴨洲、見崑崙。偏西大眞嶼・小眞嶼。轉西北取筆架山、向北至暹羅港口竹嶼。

(略)

南灣氣

南灣氣居南灣之東南、嶼小而平、四面挂脚、皆 = (左：石＋右：婁) 古石、底生水草、長丈余。灣有沙洲、吸四面之流、船不可到、入溜則吸閣不能返。隔南灣水程七更。古為落漈。北浮沈皆沙垠、約長二百里、計水程三更余。盡北處有兩山、名曰東獅象。與台灣沙馬崎對峙。隔洋濶四更、洋名沙馬崎頭門。氣懸海中。南繞沙垠至粵海、為萬里長沙頭。南隔斷一洋、名曰長沙門。又從南首復生沙垠至瓊海萬州、曰萬里長沙。沙之南、又生 = (左：石＋右：婁) 古石、至七州洋、名曰千里石塘。長沙一門、西北與南灣、西南與平海之大星、鼎足三峙。長沙門、南北約濶五更、広之番舶洋艘、往東南洋・呂宋・文萊・蘇祿等國者、皆從長沙門而出。北風以南灣為準、南風以大星為準。惟江・浙・閩省、往東南洋者、從台灣沙馬崎頭門、過而至呂宋諸國。西洋呷板、從崑崙・七州洋東、萬里長沙外、過沙馬崎頭門、而至閩・浙・日本。以取弓弦直洋。中國往南洋者、以萬里長沙之外渺茫無所取準、皆從沙內粵洋而至七州洋。此亦山川地脈聯統之氣、而於汪洋之中以限海國也。

文献

浦野起央.1997.『南海諸島国際紛争史：研究・資料・年表』東京：刀水書房

大阪府立図書館編.1992（復刻、初版 1943）.『南方渡海古文献図録』京都：臨川書店.
九州国立博物館編.2013.『大ベトナム展 公式カタログ ベトナム物語』大宰府：九州国立博物館.

韓振華主編（林金枝・吳風斌編）. 1988.『我国南海諸島史料匯編』北京：東方出版社。